



孫に伝えたい 心の航海日誌

—世界の“本当の、偉人たち—を出版して

講師：和田 昌親（1971年卒、元日本経済新聞社常務）

私とスペイン語

本論に入る前に「私とスペイン語」について少し触れておきたい。日本経済新聞記者として働き始めて10年、初の海外赴任先はブラジル・サンパウロだった。学歴はスペイン語科卒だが、スペインには今でも日経支局がないので、上司は似た言葉のポルトガル語圏に送ろうと考えたのだろう。

確かにブラジルはポルトガル語だが、駐在記者としてのカバー範囲は南米全体なので、取材言語はほとんどスペイン語だった。とりわけ、1982年のアルゼンチンでの対英国フォークランド戦争の取材で「使えるスペイン語」を習得した感じがする。母校には申し訳ないが、言語を覚えるのは学校ではなく現場だ、と実感した。

あの時は常時地元テレビで戦況が伝えられ、記者会見はすべてスペイン語と決まっていた。このため欧米英語圏の記者はイラつき、「英語で話せ」と抗議したが、アルゼンチン側の閣僚は平然と無視した。

今ではウクライナのゼレンスキー大統領をはじめ英語が普通に使われているが、当時は英語が世界全体で通用する時代ではなかった。

多くのスペイン語圏の元首らに会う

南米のスペイン・ポルトガル語圏では「偉人」とされる国家元首や著名人にたくさん会った。古くはブラジルのフィゲイレド、アルゼンチンのアルフォンシン、メネム、その後はペルーのバルガス・リョサ、アルベ

ルト・フジモリ、ニカラグアのオルテガ、ポルトガルのゲテレス…。

その後も含めると、世界全体では英国のブレア、ドイツの女性首相メルケル、旧ソ連のゴルバチョフ、イスラエルのネタニヤフにも会見した。もちろん、スペインのアスナールには直接「プラド美術館の有名絵画」の日本展覧会をお願いしたこともある（実現できなかったが）。＝肩書は当時

世界全体を視野に入れるクセがついたのは南米勤務を終えてからだ。アメリカ・ニューヨークは2回、ロンドンにも1回駐在し、じっくり外国人の品定めをする機会を得た。その結果、ある疑問が広がった。

「世界の偉人」は本当にそうなのか。「凡人（悪人）」も多いのではないか。逆に、偉人と言われることがない人たちに立派な「偉人」がいるのではないかと考えるようになった。

なぜこんな本を出したか

多忙な記者稼業から日経の経営に軸足を移すようになったころ、たまたま広島市で出版業を展開するオーナーと会い、月刊の釣り専門誌にエッセーを書くようになった。釣りとは関係のない「国際化」をテーマにしたが、編集長とは合意のうえだった。話題は様々だが、どこかで「世界の偉人と凡人」を意識していたので、新著ではちょっと風変わりなタイトルになった。初版は22年夏で私にとって4冊目。ただ、その後この出版社は理由があって廃業が決まり、新著は

残念ながら店頭販売していない。

出版の経緯はともあれ、新著の狙いははっきりしている。「この人は偉人かどうか」を見極めるヒントを小学生の子供たちに提供することにある。読むのは大人だが、何らかの形で子供に伝えてくればよい。10年ほど前に私の娘に男の初孫が誕生したこともあり、ちょうどいいタイミングと思い「孫に伝えたい」と表題に加えた。子供には人間や物事の「本質」がわかる人になってほしい。

よくある凡人のパターンはひとつ階段を昇ると、徐々に偉そうになる人。サラリーマンならお分かりになると思う。

世界にどんな偉人、凡人がいるか

いろんな分野、いろんな地域の「偉人」を探してみる。「偉人」をさがすことは「凡人」を探すことにつながる。たとえば「世界の偉人」と「凡人」がほぼ同時期に登場する例もある。

●「3人3様だが、偉人はオバマだけ？」

- ①プーチン大統領 元KGBの経歴、22年春ウクライナ侵攻
- ②トランプ前大統領 自分本位、20年大統領選挙で議事堂乱入を扇動
- ③オバマ元大統領 09年プラハ「核なき世界」演説でノーベル平和賞。16年広島訪問、キューバと15年国交回復

●「同じ貧困家庭出身。どちらが立派？」

①ムヒカ・ウルグアイ元大統領 16年訪日。世界で最も貧しい大統領。「グローバル経済は行き過ぎた大量消費社会をつくった」

②舩添元知事 16年辞職。知事時代、家族で公費滞在。海外出張も豪華ホテル、飛行機はファーストクラス。

●「人類は広島の教訓を学んでいないと言われるが、弟子がおかしい？」

①フィデル・カストロ元国家評議会議長 私は記者時代の83年キューバのハバナを訪問した。ゴミもないしホームレスもない。「カストロ主義」に驚く。2016年死去。

②中米ニカラグアのオルテガ大統領 カストロに憧れ、79年に米寄り政権を倒す「サンディニスタ革命」に成功。07年返り咲いたが、権力を振りかざし残ったのは悪評。

さて、上記のような難解な話を孫たち小学生にどう伝えるか。開高健、山口瞳らを生んだサントリーの故佐治敬三元会長に聞いてみよう。私が所属した農水省（旧農林省）の記者クラブに何度も訪れ、漫談話に花を咲かせた。佐治さんはこう答えるだろう。

「好きなようにやってみなはれ。

成否の判断はそれからだ」

